東京音楽大学リポジトリ　Tokyo College of Music Repository

あとがき

著者	坂崎 則子
雑誌名	東京音楽大学大学院博士後期課程　2022年度博士共同研究報告書
発行年	2023-03-31
出版者	東京音楽大学
著者版フラグ	publisher
URL	http://id.nii.ac.jp/1300/00001466/

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

ー　あとがき　ー

坂崎 則子

2022 年度博士課程の学生は 4 名（作曲専攻の 1 名は休学）、ヴァイオリン、ピアノ、フルート専攻の学生が参加し、今年度は「音楽演奏を考える」というテーマが設定されました。

村田 千尋先生のガイダンスがあり、1「『創作』、と『演奏』、『聴取』の三層構造から考える」、2「『即興性』と『演奏しない演奏』の問題を巡って」という基調報告に引き続き、参加された先生方、学生たちが順次発表を行いました。
さらに今年度は、外部の先生お二人をお招きしての特別講演がありました。

嶋根 淑子先生（6 月 9 日）アレクサンダーテクニック「身体の中の意識」
泉谷 地春先生（6 月 16 日）4 スタンス理論「演奏」する身体とその特性

学生達が演奏専攻であるので、それぞれの「身体と演奏との密接な関わり」が具体的、かつ理論的に解されたこれらの講演は、大変貴重なものでした。

今年度参加された先生方も、テーマに即してご自分の専門の立場から発表されました。学生達の発表は何度かに渡って行われ、毎回活発な質疑応答が交わされました。内容は広範囲に及び、学生達にとって大きな刺激となると同時に、各自の論文執筆にも大いに参考になるでしょう。
福田 麻子　演奏者が聴き手に伝えるものは何か
内崎 章太　ベートーヴェンが用いた漸次的強弱変化の指示の意図
李 子喬（リ コキョウ）モーツァルトのフルート協奏曲のためのタファネルのカデンツァ

今年度のテーマは、楽器専攻生にとっては自分の専攻楽器や、自身の音楽観に引き寄せて考察し、自らの演奏にも寄与し得るテーマでした。福田発表は演奏者が聴き手に何を伝えるのか、それを言葉によって表そうとするもので、普段演奏する中で表現するものを、敢えて距離をとって言葉で伝えようとしていました。最終的にはどうしても言葉では表出し得ないものが出てきてしまいますが、それを何とか表そうとする、そのことこそが得難い成果でした。
内崎発表はベートーヴェンのピアノ・ソナタにおける漸次的強弱変化指示を吟味し、ベートーヴェンの意図を改めて読み取ろうとしたものでした。楽譜においてそれぞれの指示が

置かれている状況や、他の諸要素も含めた包括的な見解が、さらに検討されていくことが期待されます。

リの発表はモーツァルトのフルート協奏曲第 1 番ト長調（KV313/285c）のためのタファネルのカデンツァについての研究。副題にあげられている「モーツァルトの原曲の要素を、タファネルはいかに活用したのか」という点について、分析方法や考察にまだ工夫の余地があることを指摘され、分析途上のようです。演奏の中で色々と考察している段階のようですが、分析法や言語表現の点で苦心しているようです。

博士課程が始まった当初は共同研究も A と B に分かれており、演奏面からの考察と、理論的な考察という 2 つの方向性がありましたが、現在は学生数が少ないのでひとつにまとめられています。博士論文を書くためには、どうしても自らの中の考えを文章で書く訓練をしなければならず、最初は戸惑う学生もいるようです。それでも仲間たちや先生方の発表を聞いていくうちに、次第に自らの演奏に引き寄せて考察し、興味深い内容の発表ができるようになっていきます。この時間は学生と教員とが同じフロアで毎回毎のテーマについて意見を交わす貴重な時間となっていて、今年度も学生達の成長の姿を見守ることが出来たのは実に喜ばしいことでした。